



平成31年1月7日(月)

藤 棚

第362号

狭山ヶ丘学園 学校通信

<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>
<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/js/>

集中力 持続力と環境

校長 小川義男

ご家族に不幸があった方もおられるので、ここに年賀の言葉は慎みたい。それにしても、年が変わったのだから、それぞれ、新たなる決意を固めなくてはならぬ。諸君ひとりひとりの、この一年の努力と成果に期待する。

人間に生まれついでた能力差などない。運動能力には、個人差もあるようだが、思考力に関しては、絶対に平等である。能力とは、集中力と持続力の別名だと私は思う。

但し環境は、この集中力と持続力に大きく影響を及ぼす。

私の父は大工で、小さな土建会社をやっていたが、国の政策の影響で(石炭産業重視の政策の廃止)、炭砦住宅の建設が全くなくなったので倒産した。

しかし金の備蓄は相当あったらしく、八百屋に転業した。高校2年の夏である。

毎朝三時に起きて、農家に野菜の仕入れに出向いた。卵の買い付けに、日に20キロは歩いた。当時卵は貴重品で、店に出せば、直ぐに完売した。しかし、素人に八百屋は無理である。一年経たぬうちに、店は閉めねばならなかった。まあ、勉強できる環境では無かったと思う。

やはり若者には、落ち着いた環境が望ましい。学問は、そのような静寂さを求めるのだと思う。

君らには、そのような望ましい環境があっても、スマホ、ゲームという、我から招いたり、作り出したりする悪環境もある。このふたつに、大学受験を棒に振った卒業生を、私は何人も知っている。

自ら作り出した、このような悪環境は、自ら招いたものだから、もって瞑すべしと言うべきであらう。

私の高校2年、3年は、最悪の環境に置かれていた。

国民全部が、貧しかった時代である。当時、国立大学の受験料は500円。授業料も入学金も500円であった。

その500円を用意できなくて、大学を諦めた者もいる。

まあ、昭和26年とは、そんな時代であった。こんな環境の中で私は大学に行けず、中学校の英語教員になったのだが、それは私の、正しからざる怠惰の正当化である。

諸君には理解しにくかるうが、昭和20年8月までは、我が国は、アメリカとの激しい戦闘の

時代にあった。大阪、東京は焼け野原であった。沖縄の人々は、戦闘の中で、祖国を守るためにばたばたと死んで行った。私は今も、先陣に倒れた沖縄やサイパン島の人々に、心から申し訳ないと思う。

話が逸れたが、東京、大阪の人々は、家を焼かれて地方に引っ越した。疎開と言う。眩しいような秀才達であった。見知らぬ土地に、微かな縁しかない人々を頼って疎開したのだから、親はみんな貧しかった。しかし、彼らは、(私から見れば先輩なのだが)、知性に溢れていた。キラキラしていた。

高校2年の私も、駅の除雪夫に応募したが、疎開してきた先輩達も、受験料を稼ぐために、ここで働いていた。

「炭山スコップ」と言われる大きなスコップで、背の高い台車に、線路に降り積もった雪を投げ上げるのである。本当に辛かった。昼休みに弁当を食べ、ストーブで暖まっていると、そのまま寝てしまう。昼休みが終わっても、疲れ切っているから、起きるのが死ぬほど辛い。「殺されてもいいから、このまま寝ていたい」と思った。しかし、金を貰っての労働だから、そんなわけには行かぬ。何とか、起き上がると、疎開生の先輩達は、みな揃って英単語の暗記に努めていた。

心から尊敬の気持ちが湧いた。とても敵わないとも思った。

自らの努力不足を、環境のせいにしてはならない。しかし、今でも私は、この努力不足を環境に帰責する癖が直らない。思えば私は、小人物なのだと思う。

諸君はどうだろう。自らの学習の成果が上がらないことを、環境に帰責するような事はないだろうか。

集中と持続、そのどちらかがあれば入試どころか、司法試験や公認会計士試験にも合格できるそうである。若しかすると、天才とは、この集中力と持続力を、二つながら身につけている人と言うのかも知れない。

年頭早々、説教じみた話になってしまった。年寄りの愚痴と寛恕して頂きたい。

歴史物語に馴染もう

昔、源為朝という弓の名人がいた。聞くところによると、弓は、普段は弦を張らずに、休ませしておくものらしい。しかし、実戦ともなれば、これに弦を張る必要がある。為朝の弓は、歴史に残るほどの強弓だから、ひとりやふたりの人数では弦を張ることができない。実戦の時には、その強弓を、どうやって、何人で弦を張ったのか、不思議に思って、近くに坐っている地挽先生に尋ねた。

彼は、世界史でも日本史でも、知らぬ事がない。立ち所に為朝の弓について話してくれた。為朝の弓は強弓なので、戦場で戦う武士が身につける鎧の、最も強く守られている部分をぶちぬいたそうである。だから、十人くらいの間、総掛かりで、弦を張ったそうである。「そんな強い弓の材質は何なのだろう」と尋ねると、即座に彼は「竹です」と答えた。内心、「こいつ、知らんことがないな」と私は舌を巻いたが、このような、高度の知見を持った人物は、他の教科の分野でも、本校には溢れている。各分野における、「高度の知識人」に、様々なことを教えて貰う賢さが、求められているのではないだろうか。